広報〝つる〟三百号によせて!!

上谷一丁目　中大路千代子

美しい城下町都留市の広報〝つる〟の三百号発行を聞いて、心からお目出とうございますと、私は今更ながら感慨無量の気持ちでいっぱいであります。

昭和三十二年、秋山市長から広報委員の辞令を交付され、前田市長、富山市長そして現在の高部市長と以来二十六年間を、無事にお手伝い出来得たことを心から喜んでおります。

広報も秋山市長、前田市長当時は、毎月発行ではなく時折編集会議をして発行されていたような訳で、その当時の市政も思いかえしてみると、又たのしい時代であったと思っております。

広報編集会議は、市側から収入役、教育長、企画課長外二名の係員が出席、民間側から広報委員として委嘱された五名が参加して開かれました。〝広報つる〟の題字も、はじめからですと幾度も変えられて参りましたが現在の定着した題字の魅力があり、立派な広報として手にとって私は思い出にひたっております。

今日広報のすばらしい成長をみます時、毎月発行のその努力は並々ならないものがあることと、かつての日の広報委員であった方達は、きっとわかって下さるものと私は確信しております。

私も〝広報つる〟の新年号には、お祝いとして干支の短歌を色紙にかいて発表させて頂いております。今年で二十数年つづいており命のかぎりを〝広報つる〟のためにつくしたいと、心ひそかにねがっております。

〝広報つる〟の三百号をお祝いして、つたない文章をつづりました。都留市の水や空気のおいしさを心からたたえつつ、市の発展を祈っております。

声のキャッチボールを!!

つる一丁目　清水正賢

高度な情報化の中で、市民と市政を結ぶ数頁の広報「つる」が、こゝに三〇〇号となり、その足跡をみるとき、いかにその役割の大なるかを痛感せざるを得ない。

何年か広報委員として編集に携わり、見やすい、読みやすいをモットーによりよき広報を届けようと念願していた者として、誠に感慨一汐である。情報の伝達には種々あるが、この広報「つる」は一方通行であってはならないと思う。三万市民の市政に対する声を市内各地より集めて、小さな声を大きく育てる事が大切な役割であろう。

一号から三〇〇号と、その間世相は様々に変っているが、そこには尊い歴史があり、めざましい発展があった。

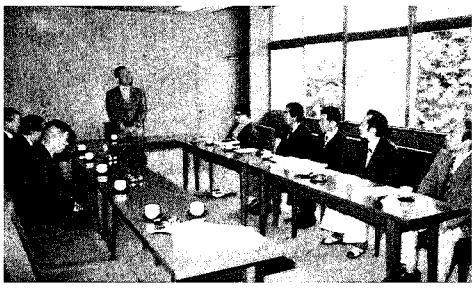
四〇〇号に向って一層の充実を切に願う者である。

広報への期待!!

小形山　鈴木盛義

私の手元には、九十号以降の都留市広報が保存されています。それ以前は残念ながら読み捨てていた訳です。が、なぜか一号だけがあります。

私が、昭和五十年広報委員を委嘱されたころ、本だなの整理中見つかったのが、昭和二十九年六月十五日発行の、「都留市広報」第一号です。



▲昭和54年当時の広報編集会議

当時、日本は〝闇市文化からの脱出時代〟で、大衆の欲望も「食」から「衣」へと変ってきた時代であるが、まだ物資の不足そのままに、粗末な紙に市役所の案内と、議会関係の記事だけが載っています。以来、関係者の努力で内容も充実して、ここに三百号の発行となったことを心から喜びます。

広報の重要性を痛感!!

上谷五丁目　志村孝一

私は、昭和四十八年に広報委員になり、広報委員会制度がなくなるまで以来十年間、広報づくりにたずさわってきました。この間、広報の重要性を痛感しつつやってきました。が、いまでは毎月の広報を楽しみに待っております。

時代の進展に伴い広報活動も種々ありますが、やはり効果が大きいものとしては広報紙ではないかと思います。

しかし、広報というのは性格上、その対象が広範囲にわたり取材、編集等非常に大変だと思います。

来年は、かいじ国体が開かれます。このなかでも、市民の協力の呼びかけ、記録写真の保存など広報の役割は大きく思います。

終りに、「市民が気軽に投稿出来るスペースを増やして下さい。」このお願いをして、多くの方々に愛読される広報になるよう期待しております。

今、改めて広報のつづりをめくってみると、都留市誕生以来三十一年の発展の歩みを克明に知る事ができます。まさに広報は、過去、現在、未来にわたって、都留市の歴史を記す貴重な記録であります。

多様化する情報社会の中で、市民の多くの眼が見つめている広報が、ますます充実することを期待します。